特集「心臓カテーテル治療の最前線」
―虚血性心疾患・ASO・不整脈・心房中隔欠損症・肺高血圧治療とTAVR・マイトラクリップ・Impellaの現状と未来―

巻　頭　言

京都府立医科大学大学院医学研究科
循環器内科学
的　場　聖　明

生まれてから最期の時まで安心・安全に暮らしたい．人生100年と言われてもできれば，家族や地域の仲間と楽しく暮らしたい．いざとなれば「神の手」のような素晴らしい治療がテレビドラマでもてはやされるものの，本当に求められているのは，最先端の医療が世界中どこでも受けられる社会です．「医療職に携わる者は，世界各地で同じ方法を用い，同じ大望に駆り立てられ，同じ目的を追求するという意味で，医学は唯一の専門職である．（中略）医師は，地球上どこの国であれ，同一の環境のもとで同一の医術を施すことができるのである．同一性は，医学が，目的とするところにも見られる．原因を究明し病気の予防をすること，痛み，苦しむ者を治療し，その苦痛を和らげること，などである．最近一世紀ほどの間に，医療職は一致団結した専門職として，世界各地で人類のために，他の専門職とは比べられないほどの大きな貢献をしてきた．われわれはあまりに大きな恩恵を受けているがゆえに，かえってその有難味を感じなくなっている．」とウイリアム・オスラー博士が1905年2月ジョンズホプキンス大学を去るにあたっての最終講演で語り，「多く友と労苦を分かち合うことの楽しさ」「一つの発明，発見が即座に世界共有の財産となること」を伝えています[1]．2年後に創立150周年を迎える本学においても2020年現在，医師，看護師，薬剤師，臨床工学技士，理学療法士，事務職，介護職，ケースワーカーなど，より幅広い職種の医療チームが結束して医療が実践できていることに感謝しています．

近年のカテーテル治療の進歩はめざましく，血管治療以外にも，以前は手術でしか治せなかった心房中隔欠損症（ASD），大動脈弁狭窄症（AS），僧帽弁閉鎖不全症（MR）の治療や不整脈診療など診断から治療まで多くの進歩を市民の皆さんに提供できるようになりました．日本中の循環器内科医が，世界トップレベルの医療を牽引すべくメディカルスタッフとともに日々努力しています．本特集では，動脈硬化疾患について，冠動脈，末梢動脈の新しい診断治療法を若菜紀之先生に，不整脈診療と今後の課題を妹尾恵太郎先生に，ASD及び脳塞栓予防の左心耳閉鎖術等を中村猛先生に解説してもらっています．慢性血栓塞栓性肺高血圧症（CTEPH）に対する肺動脈拡張術（BPA）を中西直彦先生，カテーテルによる大動脈弁置換術（TAVR）を全完先生，重症心不全に対する補助循環治療としてImpella®や経皮的人工心肺（PCPS）などを矢西賢次先生に詳しく紹介していただいています．3年前の本誌の循環器内科の特集では「急性心筋梗塞診療の未来を考える」と題して6名の他施設を含む医師に執筆していただきましたが[2]，今回の特集では，それぞれ各分野で活躍しながらも普段から強い絆で結束力を発揮している当科の臨床スタッフ6名に最新の情報をまとめてもらいました．診療のみならず，臨床研究という側面からも参考になると思います．昨今の高齢化社会では，診断においても問診や聴診，超音波検査，CT検査などで

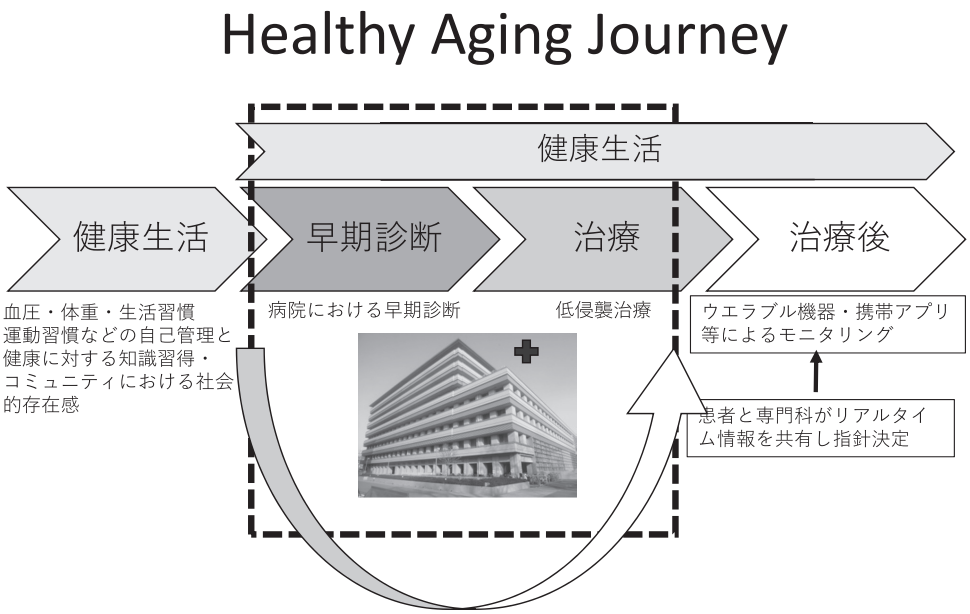

図１　若年から高齢者までの健康長寿社会を維持するための個人とコミュニティのあり方と医療機関の役割

きるだけ非侵襲的な手段で患者さん及び医療従事者の時間や負担を減らす工夫をしています．そして，これからは，入院治療においては，カテーテル治療のようにできるだけ身体に優しい医療を図１のように早期かつ短時間にすませ，日常生活や家族の負担が少ない社会のネットワークつくりが重要となってくると考えます．本特集が，現実の医療となった「“患者さん第一”のからだに優しい医療」としてカテーテル治療の最前線のご理解の一助となれば幸いです．

文　　献

1）William Osler 著　日野原重明　仁木久恵訳「平静の心」オスラー博士講演集　医学書院，2003.

2）的場聖明 他　特集「急性心筋梗塞診療の未来を考える」京都府立医科大学雑誌，vol 126: P215-268, 2017.